
とある茨の禁書目録

darkrad26

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある茨の禁書目録

【Nコード】

N9256Z

【作者名】

darkrad26

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の世界に紛れ込んだ一人の異物。

彼はどのような影響を物語に与えるのだろうか。

とある茨の禁書目録はじまります。

プロローグ

『学園都市』

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら

東京都の中央三分の一を円形に占めている。

「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っている学生の街である。

その学園都市のある研究所。

チャイルドエラ

普段なら置き去りなどを使って非人道的な研究を行っているが、今は半壊しており、銃声や悲鳴が響き渡っている。

「まったく、この程度の研究所潰すのになんで俺が出てこなきゃならないんだよ」

そう悪態をつきながら銃弾飛び交う研究所内を歩いているのはホストのような格好をした少年。

何よりも目をひくのは背中に生えている純白の羽根だろう。

時折思い出したようにその羽根を振るい、あたりを破壊している。

学園都市に8人しかいないレベル5の第二位『ダークマター未元物質』垣根帝督

である。

「しょうがないじゃない。どんなにつまらない依頼でもウチスクールに来た以上断れないんだから」

そう答えたのは14歳ほどで、小柄で華奢な体つきにも拘らず、まるでホステスのような背中の開いた丈の短いドレスを着込んでいる少女。

垣根帝督とは違い、特に何もせず一步後ろを歩いている。

「ってかお前も仕事しろよ。さつきからついてきてるだけじゃねえか」

「私の能力は『心理定規』メジャーハート、戦闘向きじゃないんだしいいじゃない。邪魔はしてないでしょ？」

「確かに邪魔はしてないけどよ。さっさと終わらせて帰りたいんだ」
「よ」

垣根はため息をつきながらそうばやくと前方にある嚴重に封鎖された扉を一瞥すると
羽根の一撃でもって跡形もなく吹き飛ばした。

「……………」

「…なによこれ!？」

部屋に入った二人の眼に飛び込んできたのは殺気立った研究員達ではなく、おびただしい数のおそらく研究員であろう死体。

ここで迎え撃つつもりだったのだろう。銃やら駆動鎧、その他にも用途のわからない機械がそこら中に散らばっている。

それだけなら驚くことなはない。他の構成員が始末した後に自分たちに来たのかもしれないからだ。

だがそれは撃たれたりなんなりしてただ死んでた場合のことだ。だがこの死体たちは例外なく全て干からびている。

中にはまるで数千年も放置され風化したように崩れているものもある。

「これってミイラ？ここはエジプトじゃなくて日本よ？」

「体中の血液が抜かれてやがる。こんなことができるのは…」

「オレだよ」

生きてる人間は誰もいないはずの部屋に声が響く。

その瞬間垣根はさらに羽根を生やし、三対の翼でもって臨戦態勢を取り、

『心理定規』はその後ろに避難し拳銃を構える。

「警告だ、第二位。最近の行動は目に余ると統括理事会からのお達

しでな。そのせいで

このオレが派遣されたわけだ。心当たりはあるか？」

その声が聞こえてきたのは二人の頭上。なぜ気付かなかったのだろうか。

そこにいたのは魂まで奪われそうな雰囲気を持ち、天井に直立する漆黒の青年。

片目を覆う黒い長髪を無造作に括り、オーダーメイドであろうダークスーツを着こんでいる。

重力に囚われていないのかまるで天井が地面だというように佇んでいる。

何よりも特徴的なのはその眼、すべてを俯瞰するような無機質な瞳だった。

「てめえ第六位か！警告なんざされる謂れはないぞ！」

そう叫びながらも内心では学園都市への反逆計画がばれたのかと焦りまくっている垣根帝督。

普段ではありえないことだが焦りや相手が第六位ということもあって思わず考え込んでしまい目を離してしまった。

気付いた時にはもう遅い。能力の相性がいいとはいえ、自分では第六位には勝てないのだ。

致命的な隙を晒したかと齒噛みしながらも一撃入れようと天井に視線をやる。

が、最早そこには誰もいない。

「ちっ！（くそっどこに行きやがった）」

思わず舌打ちをしながらいつでも離脱できるように周りに気を配る。奇襲されたらその一撃を防ぐ自身は垣根にはなかった。

「やあ久し振りだね心理定規。よかったらこれからディナーでもどうかな？」

「お久しぶりです北斗さん。私でよかったですぜひお願いします」

「やはり君は笑っている方が可愛いね」

「そんな可愛いだなんて…」

悲壮な垣根とは違い第六位と心理定規は楽しそうに会話していた。しかもさっきの雰囲気はなんだったのかというほどの爽やかさである。

「北斗オオツ！！てめえ今めっちゃシリアスだったじゃねえかよ！」

「うるさいぞ垣根。今いいところだろうが」

「うるさいわよ。今北斗さんと話してるんだから」

「えっ？俺がおかしいのか？ってか息ぴったりだなおい」

一蹴である。最早その姿は可哀そうを通り越して哀れですらあった。

そして二人は垣根を無視してまだ楽しそうに会話している。

「そつえばまだおじさん達の相手をしているのかい？
気晴らしならオレがいつでも付き合っただけよ」

「本当ですか！？じゃあ部屋をとってあるのでディナーの後にも
そこで／＼」

「相変わらず積極的だね。喜んで付き合わせてもらっよ」

「いちゃいちゃしている。」

「だが忘れていてもかもしれないがここはミイラが転がっている部屋の中である。
台なしだった。」

「おい北斗。やっぱりこのミイラ共はお前がやったのかよ？」

復活した垣根である。

実に空気の読めない男である。

「……冷蔵庫が。……当たり前だろ？他にこんなことができる奴がい

るんなら教えてほしいものだね」

「今なんつった？なあ？なあ？」

「それで警告についてだが…」

「無視かよっ！」

「黙れ冷蔵庫。そんなんだからチンピラホストって言われるんだよ」

「てめえぶっ殺してやらああっ！」

「黙りなさい冷蔵庫。北斗さんが話してるでしょ」

「なんなんだよもう…」

「またもや一蹴。懲りない冷蔵庫である。」

「そんな垣根は無視して北斗は話を続ける。」

「お前最近仕事の度に物を壊しすぎなんだよ。修繕費も馬鹿にならないらしくてな。」

「借金になるらしいから…まあ頑張れ」

「…そんなことで来たのか？」

「暇だったからな。アレイスターの頼みを断るのもあれだし」

「…苦労さまだな。…ちようどいいから仕事手伝ってくれねえか？」

お前の『茨棘之冠』ならすぐ終わるだろ？」

「さっきの会話を聞いてなかったのか？オレはこれからデートなんだから無理だ。

じゃあ行こうか？」

「はい北斗さん」

そう言うと北斗は心理定規を抱きかかえる。いわゆるお姫様抱っこだ。

何度でも言おう、ここはミイラだらけの部屋である。

「まだ仕事が終わってねえぞ！？」

「そんなもんお前がやれよ。何のためのレベル5だ」

「男女差別反対！」

「女の子には優しくするもんだよ。

…っと、言い忘れてたが借金は12億2800万だそつだ。それじゃ」

「…は？ちよつ待つっ…」

垣根が詰め寄ろうとするがすでにそこには二人の姿はなくなただ空しく声が響くだけである。

どれほど時間がたっただろうか？呆然とする垣根の前に頭部に環状

の金属製ゴーグルをつけた少年が歩み寄る。

「リーダー終わりましたよ。……どうかしましたか？」

「…12億…ふっふっふっふっふっふっふ」

「リーダー!？」

しばらく研究所に不気味な笑い声が響き渡った。

プロローグ（後書き）

はじめましてdarkrad26です。

この小説は妄想があふれ出した結果によるものなので見苦しいと思いますが、

感想もらえたりすると励みになります。

ちなみにこの小説の主人公は黙っていればインテリヤクザにしか見えな
いと言われた作者をモデルにしています（笑）

主人公紹介

名前

ミカド ホクト
御門北斗

容姿

外見年齢は24歳ほどだが実年齢は18歳。

黒髪の長髪で左目を覆い尽くしており、胸辺りまでの髪を首の後ろで無造作に括っている。

服装はオーダーメイドのダークスーツ。学生には全く見えない。顔はそこそこ整っている方だが見た目はインテリヤクザ。

能力

レベル5の第六位『茨棘之冠』
クラウンソーン

体表から黒く染まった茨のようなものを生やし、自身の体及びその茨に触れたあらゆる物を吸収する。

ただし固形物は吸収できない。

副次効果として吸収したエネルギーを使って身体強化を行える。

この能力にはまだ秘密があるようだが………

性格

黙っていれば外見も合わせて、他者を威圧するカリスマのようなものを放っているが、

しゃべり始めるとそこらへんにいるような兄ちゃん。

ただ本人は自身の外見効果を理解しており、威圧するような演技をしていることが多いため性質が悪い。

原作主人公のようなフラグ建築能力はないが、恋愛は得意らしく狙った女は必ず落とすと豪語するほど。

現在はまだ股掛けており修羅場が発生する日は近いのかもしれない。

第一話（前書き）

短いです

第一話

「さて、今日は何をして暇を潰そうか」

そんな気の抜けた呟きをもらしたのは御門北斗、つい先日垣根帝督を恐怖(?)のどん底に陥れた男である。もともと本人にとっては取るに足らない出来事ではあったが。

それはともかく現在時刻はAM11:00、平日であることから彼も学校に行かなければならないはずだが、彼に学校に行く気は全くなかった。

そもそも学校になど通ってないため、ここは学生寮ですらなく、彼が年間契約しているホテルの一室である。

「…それ私を抱きかかえながら言うセリフじゃないよね。あれか？私は愛玩人形かなにかか？」

そう彼の腕の中で文句を言うのは12歳程度のパンク系の衣装を着ている少女。前を揃えた黒い髪は肩甲骨の辺りまで伸びているが、アクセントのためか耳元だけが金色に色を抜かれている。

彼がリーダーを務める暗部組織『グループ』の構成員、黒夜海鳥である。

もともと言葉とは裏腹に頬をわずかに紅潮させ完全に甘えきつてい

る。

「ほらそんなに拗ねるなよ。さっきまでみたいにニャーニャー言うてごらん?」

「好きで言ってたんじゃないか。北斗が猫耳アタッチメントつけさせたせいだろオがっ!」

「でも盛り上がったじゃないか。けど土御門とキャラ被るし普段からは無理かなあ」

「つつっ!そもそもこんな少女に手出して恥ずかしくないのかよ口リコン!」

「老若男女の区別なく、私は全てを愛している!」

「余計悪いじゃねエかっ!しかもなにドヤ顔してやがる変態!」

「落ち着けて。口調がどごその白もやしみたいになってるぞ?」

「誰のせいだ!誰のっ!」

「キスしてやるから機嫌なおせよ」

「うるさいっ!私がその程度で機嫌なおすような軽い女だと思ったら大間違いなんだよっ!……………いや別にしてほしくないわけじゃなくてだな、その……………んっ」

「んっ(しかし暗部の女はちよろいなあ。やっぱり優しさとかに飢

えてんのかね」

しばらく部屋に水音が響いた後、そこにいたのは骨抜きになって眠る少女だけであった。

「…んにゅ…北斗お…」

「外に出てきたのはいいがどうするかな？鉄網ちゃんでもデートに誘うか、アイテムの女の子でも攻略に行くか：悩むな」

ついさっきまで女の子と一緒にいたとは思えない言葉だ。まさしく女の敵である。

今日も学園都市は人で溢れかえっているが彼の歩くところだけ綺麗に人が分かれ道ができている。

さながらモーセの如く。もっとも彼には十戒など微塵もないが。

そんな彼に物好きにも近づくものがいた。

「ちょっとアンタ！待ちなさいよ！」

「ん？やあ、美琴ちゃんじゃないか。学校はどうしたんだい？」

「もうとっくに終わったわよ。そういうアンタはどうなのよ、いつもスーツ着てるけど学校行ってるの？」

「もうそんな時間か。それよりなにかようかな？」

「そうよ！アンタ私と勝負しなさい！」

「またかい？オレとしては誤って美琴ちゃんの可愛い顔に傷でもつけたらと思うと戦々恐々だよ」

「可愛っつ…いいから勝負しなさい！第三位の私が第六位のアンタに負けるなんてあり得ないんだから！」

「だからレベル5の順位は学園都市の利益が基準であって戦闘能力には関係ないとあれほど…」

「いいからついてきなさい！場所を移すわよ！」

そう言うと美琴は後ろを振り返りもせずとんと歩いていった。その顔が赤かったのは見間違いでないだろう。実にツンデレである。

「やれやれ、不幸だ ってね」

誰にも聞こえないように弦きながら後ろをついていく彼の口元は妖しく歪んでいた。

第一話（後書き）

この主人公は下種です、外道です、屑です。
場合によっては寝取りもあるかもしれませぬ。

まあ女の子もばれなきや幸せそうですしいいのです…多分（笑）

さて次話ですが今日中には書きたいと思いますがまだ内容を決めて
ませぬ。

このまま美琴と戦闘して能力の一端を示すか、アイテム攻略ルート
にするか。

皆さんはどちらがいいですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9256z/>

とある茨の禁書目録

2011年12月29日03時46分発行